

専攻科生を送っての所感

学長 齋藤 秀 晃

平成10年3月13日、看護学科2期生の卒業式と専攻科（地域看護学専攻、助産学専攻）の1期生の修了式を併せ行った。これにより本学はやっと初期の目的である3職種を世に送る使命を果たしたことになる。

本学が今、専攻科生を世に送り、ここで種々の教育現場の問題が提起されていることも事実である。この様な時期に私どもは自己点検・評価を行ない、大学を見直す必要に迫られている。

公立の学校は多くの場合、その地域のために働ける、立派な社会人の養成を願って設立される。しかし、また一方では一地方に限らず、国内や国外に貢献しうる人（指導者、研究者）の養成をも兼ねていることは否定できない。この両者を育成することは教育者としての面目であろう。

看護学の歴史を振り返ってみれば、明治初期に欧米から医学とともに近代看護学が伝えられ、女子教育の先鋒として出発し、歴史を積んできた。さらに、第2次大戦後に米国的看護学の指導を受けて発展し、高校卒に3年間の教育を基盤に専門教育を定着させ、高等教育の必要性から短期大学に於ける教育が拡大していった。一方、高等教育機関に於ける看護教員の養成は、4年制大学に看護教育課程が設置された。

専門医療の高度化、高齢、小子化社会の到来とともに、更なる看護ニーズへの昂まりが要求されるに至り、これを受けて当然のように看護教育におけるカリキュラムの改定が行なわれるようになった。本学に於ても、この新しいカリキュラムを十分にこなすには3年間の教育に余裕をもった学習の必要性に鑑み、更に1年間の専門課程（専攻科）を設けた。看護学の新しい教課を充分修得させるためには4年制の大学を目指して、斯学の充実を企図すべき時であろうと考える。

今回、専攻科を学巣より送り、以上のような述懐をした。わが国のより良い看護が先進国として恥なき姿となることは、国民にとって大きな幸せであろうことを重ねて申し上げておきたい。

平成10年7月